

平成 27 年 12 月 21 日

第 25 回日本医療薬学会年会実施報告書

第 25 回日本医療薬学会年会
年会長 安原 真人
東京医科歯科大学大学院 教授

事業名 : 第 25 回日本医療薬学会年会

主催者名 : 一般社団法人日本医療薬学会

年会長 : 安原 真人 (東京医科歯科大学大学院 教授)

会 頭 : 佐々木 均 (長崎大学病院 教授・薬剤部長)

後 援 : 一般社団法人日本病院薬剤師会、一般社団法人東京都病院薬剤師会
公益社団法人神奈川県病院薬剤師会、公益社団法人日本薬剤師会
公益社団法人東京都薬剤師会、公益社団法人神奈川県薬剤師会
日本薬科機器協会

実施日程 : 平成 27 年 11 月 21 日 (土) ~23 日 (月・祝)

実施場所 : パシフィコ横浜

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい 1-1-1

会場数	口演会場	: 12
	ワークショップ会場	: 1 (薬科機器ワークショップ)
	ポスター会場	: 1
	展示会場	: 1

年会の趣旨

第25回日本医療薬学会年會を、平成27年11月21日(土)～23日(月・祝)の3日間、パシフィコ横浜(横浜市西区)にて開催した。日本医療薬学会は今年で設立25年を迎えたが、この間医療と薬剤師を取り巻く環境は劇的に変化し、薬剤師の職能を支える医療薬学の研究・教育は大きな発展を遂げた。そこで、第25回という節目に当たる本年會においては、これまでの医療薬学の発展を振り返ると共にさらなる飛躍を目指して、テーマを「医療薬学の進歩と未来 一次の四半世紀に向けて」とした。

日本医療薬学会の前身である日本病院薬学会は、平成2年6月に日本病院薬剤師會が中心となって設立された。平成13年1月に学会の名称を「日本医療薬学会」に変更し、病院薬剤師に限ることなく、保険薬局から製薬企業、行政まで、学会のウイングを大きく広げた。さらに平成20年12月に学会の法人化を果たし、「一般社団法人 日本医療薬学会」となった。設立初年度1,200人余りであった会員数は右肩上がりに増加し、昨年末には1万人を超えた。会員数の増加とともに、年會の参加者数や演題数、シンポジウム数なども増加し、2日間の会期では収まりきれない状況が理事會で協議され、第25回年會より会期を3日間に延長することとなった。会期延長に伴い、学生以外の年會参加費を1000円ずつ増額した。また、これまで年會前日に開催していた病院薬局協議會／學術フォーラムは年會期間中に行うこととした。

各プログラムは、「医療薬学の進歩と未来 一次の四半世紀に向けて」というメインテーマの下、参加者が最新の研究成果について忌憚なく議論し、未来を語り合う機会となるよう企画した。特別講演は、薬学、薬事行政、医療、医学、教育、経済の各領域を代表する6名の先生方にご講演いただいた。教育セミナーでは、4名の薬学部長の先生方にこれからの薬学教育のあり方を語っていただいた。また、特別企画シンポジウムでは、次の四半世紀を支える6名の若手シンポジストを中心に医療薬学の課題と展望について討論した。国際シンポジウムでは、タイ、韓国、中国、日本の4名のシンポジストにより近未来の医療薬学を展望した。公募シンポジウムには56件の応募があり、実行委員・組織委員による審査の結果、43件を採択した。一般演題には過去最高となる1705題の応募があり、実行委員による査読の結果、1699題(口演:326題、ポスター:1373題)を採択した。さらに、前年會に引き続き、一般演題(口演)の中から優秀演題を選考することとし、演題応募時に選考を希望した演題(186題)の中から厳正な選考を経て、最終的に10題の演題を選出し表彰した。

本年會では会期を3日間に延長し、ゆとりあるプログラム編成を心がけた。さらにポスターセッションの会場スペースと閲覧時間についてもできるだけ余裕をもたせ、ポスター示説時間が他のセッションと完全に重複することのないよう配慮した。また、講演要旨集の早期配布、携帯端末用のアプリの設定、託児室の設置など、参加者の利便性向上に努めた。

会費等の設定

参加費	正会員	非会員	学生	懇親会	一般	学生
事前参加登録	9,000円	13,000円	3,000円	事前登録	8,000円	4,000円
当日参加登録	13,000円	16,000円	4,000円	当日登録	10,000円	5,000円

講演要旨集：3,000円（当日）、3,500円（事前：郵送費含む）

市民公開講座：無料

事業内容

1. メインテーマ 医療薬学の進歩と未来 一次の四半世紀に向けて－
2. 年会長講演 1題
3. 特別講演 6題
4. 日本医療薬学会 学術貢献賞受賞講演 2題
5. 日本医療薬学会 奨励賞受賞講演 3題
6. 日本医療薬学会 Postdoctoral Award 受賞講演 5題
7. 教育セミナー 1セッション
8. 特別企画シンポジウム 1セッション
9. 国際シンポジウム 1セッション
10. シンポジウム（公募） 43セッション
11. 一般演題 1,699題
 - 口演 326題（うち優秀演題候補 50題）
 - ポスター 1,373題
12. International Poster 10題
13. 平成 27 年度日本病院薬剤師会病院薬局協議会／学術フォーラム
14. スポンサーードシンポジウム 1セッション
15. 共催セミナー 30セッション
16. 日本薬科機器協会ワークショップ
17. 市民公開講座

参加者数 一般参加者数：9,257名
 招待者数：100名
 懇親会：318名（招待者除く）
 市民公開講座：約100名

一般参加者内訳参考資料

参加者内訳	正会員	非会員	学生	合計
事前参加登録	5,443名	1,655名	184名	7,282名
当日参加登録	615名	1,157名	102名	1,874名
海外		101名		101名
一般参加者計	6,058名	2,913名	286名	9,257名

運営組織

年会長 安原 真人 東京医科歯科大学

<組織委員>

青山 隆夫	東京理科大学	明石 貴雄	東京医科大学病院
厚田幸一郎	北里大学病院	石井伊都子	千葉大学医学部附属病院
伊藤 清美	武蔵野大学	大森 栄	信州大学医学部附属病院
小口 敏夫	山梨大学医学部附属病院	折井 孝男	NTT 東日本関東病院
木内 祐二	昭和大学	吉光寺敏泰	MeijiSeika ファルマ
木村 利美	東京女子医科大学病院	佐々木忠徳	昭和大学
鈴木 洋史	東京大学医学部附属病院	高尾 良洋	横浜市立市民病院
高橋 弘充	東京医科歯科大学医学部附属病院	谷川原祐介	慶應義塾大学
永田 将司	東京医科歯科大学医学部附属病院	濱 敏弘	がん研有明病院
林 昌洋	虎の門病院	本間 真人	筑波大学附属病院
望月 眞弓	慶應義塾大学	山田 安彦	東京薬科大学
山本康次郎	群馬大学医学部附属病院	山本 信夫	保生堂薬局
吉田 久博	明治薬科大学	脇山 尚樹	第一三共プロファーマ

<実行委員>

赤川 圭子	昭和大学	雨宮 貴洋	東京大学医学部附属病院
荒木 拓也	群馬大学医学部附属病院	有吉 範高	千葉大学医学部附属病院
安東 幸弘	第一三共	五十嵐 俊	横浜市立脳卒中・神経脊椎センター
石渡 泰芳	東京医科歯科大学医学部附属病院	井上 勝央	東京薬科大学
今村 知世	慶應義塾大学	畝崎 榮	東京薬科大学
大野 育正	第一三共	大野 能之	東京大学医学部附属病院
岡田 裕子	高崎健康福祉大学	小川ゆかり	武蔵野大学
長内 理大	千葉大学医学部附属病院	神林 泰行	筑波大学附属病院
工藤 敏之	武蔵野大学	栗原 竜也	昭和大学
黒山 政一	北里大学東病院	向後 麻里	昭和大学藤が丘病院
国分 秀也	北里大学病院	小林 昌宏	北里大学病院
佐藤 光利	明治薬科大学	嶋田 修治	東京理科大学
菅原 充広	北里大学病院	杉浦 宗敏	東京薬科大学
鈴木 賢一	がん研有明病院	鈴木 貴明	千葉大学医学部附属病院

鈴木	亘	がん研有明病院	鷺見	正宏	横浜薬科大学
高田	龍平	東京大学医学部附属病院	高橋	賢成	東京女子医科大学病院
高橋	裕	東京医科歯科大学医学部附属病院	田中	昌代	NTT 東日本関東病院
中本	恵理	がん研有明病院	西本	典広	第一三共
根岸	健一	東京理科大学	前	浩史	東京女子医科大学病院
真野	泰成	東京理科大学	峯村	純子	昭和大学北部病院
山本	武人	東京大学	山本美智子		東京医科歯科大学医学部附属病院
横川	貴志	がん研有明病院	渡邊	徹	昭和大学江東豊洲病院

事業成果

第 25 回日本医療薬学会年會を、平成 27 年 11 月 21 日（土）～23 日（月・祝）の 3 日間、パシフィコ横浜（横浜市西区）にて開催したところ、参加者は招待者を含め 9,300 名を越え、年會史上最大の参加者数を記録した。

本年會のメインテーマは、「医療薬学の進歩と未来 一次の四半世紀に向けて」とした。特別講演は、薬学、薬事行政、医療、医学、教育、経済の各領域を代表する 6 名の先生方に講演いただいた。特別講演 1 では、京都大学大学院薬学研究科の橋田充教授が「薬物投与技術の進歩と将来の医療」と題して、多様な科学技術分野の中での薬学の位置付けを概観するとともに DDS の進歩について講演された。特別講演 2 では、厚生労働省の森和彦審議官が「薬剤師の真価の発揮に向けて」と題して、行政の立場から薬学・薬剤師の現状と課題について解説され、「モノ」から「ヒト」へと薬剤師業務の方向性を示された。特別講演 3 では、聖路加国際病院の福井次矢院長が「これからの医療とわれわれに求められるもの」と題して、医師、教員、研究者、そして病院や大学の管理者としてのご経験に基づき、広くこれからの医療のありかたについて講演された。特別講演 4 では、東京大学大学院医学系研究科の水島昇教授が「オートファジーの謎に迫る」と題して、真核細胞に普遍的な細胞内分解システムであるオートファジーについて、研究の端緒から最新の知見まで体系的に紹介された。特別講演 5 では、American College of Clinical Pharmacy (ACCP) の Wafa Y. Dahdal 先生が「Standards for Clinical Pharmacy Practice」と題して、国際的な視点から薬学教育と薬剤師業務の進歩を紹介するとともに、ACCP におけるクリニカルファーマシストの業務基準について解説された。特別講演 6 では、一橋大学国際・公共政策大学院の井伊雅子教授が「医療のあり方を経済学で考える」と題して、レセプトデータの解析例などを海外と比較する形で紹介され、費用対効果分析に基づく評価や政策立案の必要性を指摘された。

本年會では、「薬学教育の将来を考える」と題した教育セミナーを企画した。6 年制と 4 年制が並立した新薬学教育制度の下で 10 年が経過し、本年度から改訂モデルコアカリキュラムによる 6 年制教育がスタートするなど、薬学教育の改革は進みつつあるものの、なお多くの課題を抱えている。そこで、4 名の薬学部長の先生方に各大学における取組とこれからの薬学教育のあり方を語っていただいた。質疑では、教員に加えて現場の薬剤師から多くの意見があり、本セミナーは薬学教育の将来について改めて考える良い機会となった。

また、25 年という節目に医療薬学の更なる飛躍を期して、次の四半世紀を支える若手による特別企画シンポジウムを企画した。「次の四半世紀に向けて医療薬学を考える」とのテーマのもとで、病院薬剤師、薬局薬剤師、大学教員、行政と異なる立場の若手シンポジストから、医療薬学の未来に向けた課題と展望について講演いただいた後、会場の参加者も交えて討論を行った。総合討論では、参加者からも多くの質問・コメントがよせられ、当初 20 分の討論時間を設定していたが、最終的には 40 分間に延長した。議論はつきなかつたものの、医療薬学の将来を考える上で貴重なシンポジウムとなった。

公募シンポジウムには 56 件の応募をいただいた。審査方法は、①学術的意義、②医療への貢献、③社会的意義／参加者の関心、④年會テーマとの関連、⑤活動実績／準備状況の 5 つの評定要素に関する絶対評価を行い、さらに 5 段階の総合評点（相対的評価）を付すこととした。7 名の実行委員による審査結果に基づき、最終的に組織委員会で 43 件を採択した。内容は多岐にわたり、科学論文の書き方から、基礎と臨床の橋渡し教育、フィジカルアセスメント、スポーツファーマシスト、がん化学療法、処方電子化など、いずれも年會テーマに相応しい内容であった。ここ数年の年會では、8～9 つのシンポジウ

ムが同時に平行開催されていたが、本年会では会期が 3 日間となりプログラムに余裕をもたせるとの方針から、シンポジウム会場を 6 つにしぼり各会場のサイズをできるだけ大きくし、より多くの参加者が希望するシンポジウムに臨むことができるよう配慮した。さらに 5 つの会場については事前に中継会場を準備し、多数の参加者に対応できるよう心がけた。しかしながら、なお一部のシンポジウムでは中継会場もあふれるほどの盛況ぶりであった。

一般演題は、応募いただいた 1705 題を実行委員で査読し、1699 題（口演：326 題、ポスター：1373 題）を採択した（採択後の演題取り下げ 7 題）。口演会場は 5 会場用意したが、118～132 席と小さな会場を割り当てざるを得ず、多くのセッションで会場から参加者があふれる事態となった。一方、ポスター発表は、広い会場を準備したことで、各ポスターの展示期間をほぼ丸 1 日確保しつつゆとりあるポスターボードの配置ができ、混雑も少なく参加者からも好評であった。

本年会では第 24 回年会と同様に、一般演題（口演）の中から優秀演題を選考した。まず演題登録時に優秀演題に応募した 186 題について、実行委員 17 名で一次選考を行った。選考方法は、要旨および応募理由による書面審査とし、1 演題につき 4 名の審査員による 5 段階の相対評価を行い、上位 50 題を選出した。年会初日の二次選考では、①研究テーマの新規性、②研究内容（方法、結果および考察）の妥当性、③研究内容の学術的・社会的波及効果、④プレゼンテーションの明瞭性および質疑応答の 4 項目について、優秀演題選考委員 20 名による審査を行った。審査結果に基づき、最終的に優秀演題選考委員会で 10 件の優秀演題を選出し、2 日目の懇親会で表彰を行った。

ランチョンセミナーは 3 日間で 30 件の共催セミナーを実施した。座席数のおおよそ 85%を事前登録制とし、整理券を年会参加証と共に郵送したことから、当日大きな混乱はなかった。

最終日の市民公開講座では、神戸大学医学部附属病院薬剤部長の平井みどり教授とシンガーソングライターのより子さんに、講演とミニライブを通して「いのち輝く未来に向けて」というテーマで語り合っていた。より子さんからは、歌声だけでなく「がん患者」としてのご自身の体験も語っていただき、涙を流す参加者もいるなど心に響く大変貴重なセッションとなった。

本年会でも昨年度と同様に、携帯端末用の要旨集アプリを導入した。演題の検索に加えて、聴講したいセッションや演題を自分のスケジュールとして登録することで、大会期間中のオリジナル予定表が作成できるなどの機能を有し、ダウンロード数は 5,219 と参加者の半数以上の利用があった。また、ランチョンセミナーのチケット配布状況や、優秀演題受賞者の公表など、年会期間中の事務局からの連絡もアプリを通じて行うことができ、参加者にも好評であった。

子育て中の参加者を支援するため、本年会でも託児室を準備した（外部委託）。当初 1 日あたり 20 名の受け入れを上限としていたが、多くの応募があったことから受け入れ枠を拡大し、年会初日が 34 名、2 日目と 3 日目は各 37 名の方に利用いただいた。

本年会は会期を 3 日間に延長した初めての年会であった。「医療薬学の進歩と未来 一次の四半世紀に向けて」 というテーマの下に多くの皆様が集い、様々なプログラムを通して学問の進歩と医療の変化を実感し、情報交換する機会となったことを慶びたい。大きな混乱もなく盛会のうちに終えることができたのは、日本医療薬学会理事会・事務局の絶大なるご支援と、組織委員・実行委員など多くの関係者のご協力によるものであり、感謝申し上げる次第である。

第25回日本医療薬学会年会 優秀演題一覧

演題番号	筆頭演者名	筆頭演者所属	演題名
21-8-018*-07	東 加奈子	東京医科大学病院 薬剤部	服薬カウンセリングに対する支払意思に関する研究
21-6-09*-03	安達 昂一郎	京都大学医学部附属病院 薬剤部	院外処方せんにおける疑義照会一部不要プロトコルの効果
21-8-018*-10	伊藤 佳織	藤田保健衛生大学 医学部 血液内科学	骨髄異形成症候群(MDS)に対するL-ロイシン療法の安全性と有効性の臨床研究(臨床第2相研究)
21-7-014*-10	加藤 優	岐阜薬科大学 実践社会薬学研究室	FP療法およびBEP療法におけるアプレピタント投与延長の有効性とその費用対効果解析
21-5-05*-03	木村 丈司	神戸大学 医学部 附属病院 薬剤部	薬剤師によるSTOPP criteria version 2を用いたポリファーマシーへの介入
21-4-02*-07	中西 里佳	岡山大学 薬学部	ヒト血漿中および乳汁中のdexmedetomidine濃度測定法の開発とその臨床応用
21-6-010*-08	新潟 文典	秋田大学医学部附属病院 薬剤部	膠原病患者におけるタクロリムスとイトラコナゾールとの薬物相互作用に及ぼすCYP3A5およびABCB1遺伝子多型の影響
21-4-02*-08	原内 智慧	浜松医科大学 医学部附属病院 薬剤部	細菌性膣炎の妊婦におけるクロラムフェニコール膣錠の血中移行性の定量的評価
21-5-06*-09	鋒山 香苗	京都大学医学部附属病院 薬剤部	非イオン性ヨード造影剤によるアレルギー様症状の有害事象に及ぼす水分摂取推奨の影響
21-7-013*-04	山本 将太	京都大学医学部附属病院 薬剤部	悪性黒色腫に対するニボルマブ治療における免疫関連有害反応の検討

(五十音順)

優秀演題選考委員長：青山隆夫（東京理科大学）

二次審査委員：明石貴雄（東京医大病院）、厚田幸一郎（北里大学病院）、石井伊都子（千葉大学病院）、伊藤善規（岐阜大学病院）、大森 栄（信州大学病院）、桂 敏也（立命館大学）、木村利美（東京女子医科大病院）、崔 吉道（金沢大学病院）、佐々木忠徳（昭和大学）、千堂年昭（岡山大学病院）、高野幹久（広島大学）、直良浩司（島根大学病院）、中村智徳（慶應義塾大学）、濱敏弘（がん研有明病院）、本間真人（筑波大学病院）、増田智先（九州大学病院）、三浦昌朋（秋田大学病院）、森田邦彦（同志社女子大学）、山田安彦（東京薬科大学）